

「いま」を投影する——繰り返される戦争の悲劇

ミラノ・スカラ座の最新作、ヴェルディ《シチリア島の夕べの祈り》

2月14日●ミラノ・スカラ座

取材・文＝中 東生



ミラノ・スカラ座《シチリア島の夕べの祈り》から ©Brescia e Amisano / Teatro alla Scala

コロナ禍がなければ、ファビオ・ルイーギがチューリヒ歌劇場で指揮するはずだったヴェルディ「歌劇《シチリア島の夕べの祈り》」をミラノのスカラ座に観にいった(2月14日)。ちょうど、その日は新しくできたスカラ座のストリーミング・プラットフォーム“LaScala.TV”初の生放映が行われたが、アッリーゴ(アンリ)役のピエロ・ブレッティ(T)が病気になる、マッテオ・リッピ(T)という安心できる代役が見つかったのは幸運だった。歌に集中し、声を節約しながらも、急所をおさえて歌い切った。

ルイーギはチューリヒ歌劇場で、オペラ全曲の代わりの「ヴェルディ・ガラ」で本作の序曲を披露したが、その出来を超えた、

熱い、深い音がオーケストラ・ピットから湧き上がる。下から管楽器を持ち上げる弦楽器の底力が凄い。

ヒロインのマリーナ・レベカ(S)は、声の線は細いが、マリア・カラスの記憶が残るこの歌劇場で、カラス並みに高音から胸声に急下降するパッセージも聴かせ、喝采を浴びた。ほかの歌手もハイレベルだ。

しかし、フーゴ・デ・アナの演出は観客たちを怒らせた。「このオペラの雰囲気をおち壊し、時代考証も減茶苦茶だ」と途中で帰る客もいた。「アッリーゴがゼレンスキーみたいだ」という声も聞こえ、代役ゆえの偶然の産物でもあったのだが、それが演出家のコンセプトだったと思う。古くはシチリア王国を侵攻したフランス、現在は

ウクライナに侵攻するロシア。これだけ文明が発達しても、歴史は繰り返されることを表現したいのだろう。ルイーギの音楽も、非常にシンフォニー的なアプローチの土台に立っている。イタリアの巨匠全盛時代には受け入れられなかったかもしれないが、幕が進むにつれて拍手が増えていき、最後は皆が幸せに幕を下ろすことができた。伝統を守りつつ、新しいアイデアを頭ごなしに排除しない姿勢が必要になってくる時代だ。ほかの主要歌劇場から遅れを取ってストリーミングをスタートしたが、4K解像度のカメラ9台と、高度な騒音消去効果を駆使して撮影されたオペラの殿堂の「いま」を観ることのできる、“LaScala.TV”はエキサイティングだ。